

ドイツ語における Modalität の 概念とその文法構造 (1)

井 口 省 吾

I. Modus, Modal, Modalität

相互に関係のありそうなこの三つの文法概念は、ドイツ文法においては必ずしも明確に関連づけられて規定されていない。例えば Duden の文法は、Modus を Aussageweise と称し、1966年の改訂第二版では次のように規定している。

Unter dem Modus versteht man die Aussageweise, die als Ausdruck einer Stellungnahme des Sprechers den Geltungsgrad der verbalen Aussage kennzeichnet. Wir unterscheiden drei Modi: Indikativ, Konjunktiv und Imperativ.⁽¹⁾

これは、古くは Behaghel⁽²⁾、比較的最近では Glinz⁽³⁾ なども行っている規定で別に珍しいものではない。ところが Duden は Modaladverbien の規定となると Modus と Modal の関係が混乱してくる。上述の第二版では文中における副詞の役目を

Dem Adverb fällt die Aufgabe zu, die im Satz genannten Umstände nach den allgemeinsten Umrissen zu kennzeichnen.⁽⁴⁾

と説明し、Umstände の中に a) Umstände des Ortes b) Umstände der Zeit c) Umstände der Modalität d) Umstände des Grundes の

四つがあるとする。その中で Modus と関係のありそうな c) Umstände der Modalität には更に四つの下位区分があり

α) Die Verhaltensbeschaffenheit, die Art und Weise, die Qualität

β) Die Zahl, das Maß, die Quantität

γ) Der Grad, die Intensität

δ) Die Redeweise, die Modalität der Aussage im engeren Sinne
があるとする。⁽⁸⁾ この下位区分の中で実際に Modus の概念と関係のあるのは最後の項目 (δ) だけであり、他の三つの項目は Modalität の名のもとに挙げられていても Modus との関係はなさそうである。この混乱は Modalsatz と称するものの規定にも現われている。Duden は Modalsatz を

Der Modalsatz gibt an, wie sich der im übergeordneten Satz genannte Sachverhalt, das dort genannte Geschehen oder Sein, vollzieht.

と説明し、

Die Modalsätze können folgende Umstände bezeichnen :

1. die Modalität im engeren Sinne :

(例文) Er verabschiedete sich von mir, *indem* er mir freundlich zulächelte.

2. den fehlenden oder stellvertretenden Umstand :

(例文) Er verleumdete mich, *ohne daß* er einen Grund dafür hatte.

3. den einschränkenden (restriktiven) Umstand :

(例文) Er wird daran arbeiten, *soweit* er dafür Zeit findet.

と続けているが、ここで言う Modal / Modalität は Modus の概念と直接の関係はないと考えてよい。のみならず、副詞の Modalität の下位区

分 (δ) で挙げられている Die Redeweise, die Modalität der Aussage *im engeren Sinne* と, Modalsatz の下位区分(1)の Die Modalität *im engeren Sinne* の *der engere Sinn* は明らかに異質のものである。前者は Modus に関係のある Modalität であるのに対し, 後者は Sprecher の立場とは関係のない客観的な Art und Weise を Modalität と称している。

Duden のこの混乱の原因は巻末の術語解説をみると納得がゆく。そこでは “Modus (lat. *modus* = Art und Weise)” の項には先に引用したような Sprecher が自己の発言に対してとる立場という解説がなされているが, “modal (lat. *modus* = Art und Weise)” と “Modalsatz (lat. *modus* = Art und Weise)” の項では, たんに Art und Weise の表現という説明しかついていない。⁽⁷⁾ つまり Duden 第二版では Modus は sprecherbezogen な文法概念であるのに, Modal は必ずしも sprecherbezogen なものでなくともよいことになっている。しかも, 本文中の説明では modal, Modalität という言葉が互いに異質な二つの概念のいずれにも無差別に使われているのである。

Duden 第二版では Modalität の規定があいまいであるために Modalverb の説明が不十分である。

Modalverb (lat. *modus* = Art und Weise) = Verb, das vorwiegend ein anderes Sein oder Geschehen modifiziert. Es kann eine Notwendigkeit, eine Möglichkeit, eine Erlaubnis u. ä. ausdrücken.⁽⁸⁾

この場合の Modalität は “Modal (= Art und Weise)” の場合と違って Modus に関係しているらしいことは, Modalverb を使う表現は命令法や接続法で書き換えることが出来るという本文中の説明からもうかがえるが,⁽⁹⁾ Modalverb は常に Modus 的 Modalität を保有しているのかどうか, くわしい説明は見あたらない。

最新版の Duden 第三版 (1973) では、巻末の術語解説は第二版と同じであるが、Modalverben の規定の中に注目すべき補足が加えられている。

第一の点は、Modalverben から命令法はつくられ得ないということである。⁽⁹⁾これは、Modalverben が Modus の一部を内包していることを暗示する。しかし、この Modus はいかなる場合にも文意に出ているとは限らない。補足の第二はこの事に関してである。

Mit den Modalverben kann das, was gesagt wird, grob gesprochen, in zweifacher Weise modifiziert werden: objektiv und subjektiv.⁽¹⁰⁾ここで objektiv というのは、Modalverben が、主語と不定法であらわされている事態との関係を述べている場合で、Sprecher が発言に対してとる特別の立場は含まれていない。Duden によると、この場合には動詞の省略が可能であり (Er kann Französisch), さらに Modalverben を完了形にすることも出来る (Er hat / hatte gut schwimmen können)。Duden の分類によると三種の objektiver Gebrauch が考えられうるという。

1. Möglichkeit-Notwendigkeit

a) können-dürfen: Möglichkeit

Wir haben die Arbeit nicht schaffen können.

Darauf dürfen Sie stolz sein.

b) müssen-wollen-sollte-dürfen: Notwendigkeit

Er hat es tun müssen.

Dies Gerät will gut gepflegt sein.

Das sollte / dürfte (= müßte / muß) man langsam eigentlich wissen.

2. eigener Wille-fremder Wille

a) wollen-mögen: eigener Wille

Der Vater will am Samstag arbeiten.

Ich mag nicht länger warten.

- b) sollen-mögen-müssen : fremder Wille

Du sollst zur Tagung fahren.

Der Chef sagt, Müller möge / möchte (= solle) einmal zu ihm kommen.

Du mußt (= sollst) jetzt still sein.

- c) dürfen-können : Erlaubnis

Niemand darf den Raum verlassen.

Stephan darf / kann ins Kino gehen.

3. konjunktivische, temporale Bedeutung u. ä. der Modalverben

- a) Parallelität zu *würde*

wollte, möchte, sollte が *würde* + Infinitiv と同じ意味を持っていることがある。——例文省略——

- b) Ausdruck des Zweifels und der Ungewißheit

sollte が疑問文に使用された場合——例文省略——

- c) Ausdruck bestimmter temporaler Verhältnisse

sollte が過去の事態を物語るときに、次に来る事態を先取りして述べるのに使われる。

Dieser Entschluß sollte sich drei Jahre später als sehr verhängnisvoll erweisen.

われわれは Duden の述べているこの三種がすべて objektiver Gebrauch だとは決して思わない。例えば、2 の *eigner Wille* とか、3 の諸例が Sprecher のとる立場を考慮に入れない表現だとは思わないが、1 の a や b (*sollte* / *dürfte* / *müßte* は一応除く) の諸例のように、Modalverben の

用法の中で Sprecher の立場を考慮に入れないでよい、いわば独立動詞的用法があることは確かである。

次に Duden が subjektiver Gebrauch というのは、Modalverben が Sprecher の個人的立場を表現している場合であり、この場合には動詞の省略はおこなわれ得ず (Er soll sehr klug *sein*)、動詞そのものは屢々完了不定詞で使われるが (So muß es *gewesen sein*)、Modalverben の完了形は不可能であるという。subjektiver Gebrauch には二種あって、

1. Vermutung, Annahme

Er kann das Geld auch verloren haben.

Heute abend dürfte es ein Gewitter geben.

Er mag etwa 40 Jahre alt sein.

So muß es gewesen sein.

2. Stellungnahme zu einer Äußerung u. ä.

Er will dort gewesen sein. (主張)

Karl soll dort ^(ist) gewesen sein. (噂)

のとき区分がなされている。ここでも、われわれはこの二種のいずれもが subjektiver Gebrauch だとは思わないが (特に 2 の諸例)、Modalverben の用法の一部分は subjektiver Gebrauch であるという事実は疑えない。

Duden 第三版の功績は、Modalverben の用法に objektiv と subjektiv の二種があり、subjektiver Gebrauch は Modus の用法と酷似しており、objektiver Gebrauch はそうではなくて、むしろ一般の動詞の用法に似ていると見当をつけたことと、subjektiver Gebrauch は Sprecher からみた 現在の用法しかないと暗黙のうちに想定していることである。しかし、その具体的な分類は上述のように混乱している。混乱の原因は動詞の省略が可能であるかないか、Modalverben 自体が完了形をつくれるか否かと

いった文の表層構造の形式的分類で Modalität をとらえようとしたからである。われわれはむしろ Modalität を文の構造の中の、表層ではうかがい知れぬ深い層に潜むものだと仮定する。しかも、論理学でいう Modalität とは多少異なり、自己の発言に対する Sprecher の心的態度を表わすもので、文法的には動詞の語形 (Modi)、助動詞、副詞、音調などにも現われてくるものだと考える。この場合、多くの文法書にみられるように “Modal” を Art und Weise とラテン語源にしたがって解釈し、Sprecher の心的立場、ないし態度と直接的関係のない文肢にまで拡大解釈することは避けたいと考える。われわれは “Modal” は Modus の形容詞であり、Modus-Modal の基盤になる概念を Modalität と解する。この点では、“Modal” をやはり Duden と同じように Art und Weise と客観的な文肢にまで拡大解釈をしているが、W. Jung の “Modalität” の定義は、(sollen の用法に関する Wiedergabe der Meinung eines anderen を一応除くと) われわれのものにかなり近い。

Eine Aussage kann vom Standpunkt des Sprechers aus wirklich, vorgestellt, möglich, vermutbar, erwünscht, befohlen, erforderlich, unsicher, unwirklich sein. Sie kann die Wiedergabe der Meinung eines anderen sein, mit mehr oder weniger persönlicher Zustimmung. Um diese verschiedene Geltung, die Modalität der Aussage auszudrücken, bedient sich die Sprache verschiedener Mittel, und zwar lexikalischer, syntaktischer und grammatischer Mittel.⁹⁴⁾

Jung では音韻による手段とか、語順などの文体的な手段が省かれているが、Feuer! Feuer? Feuer!?! の場合を考えると、当然それらを含めて考えてよいものと思われる。

さまざまな表層構造、ないし現象形態をとって現われてくる Modalität を

統一的な見地に立って観察しようと試みたのは、総合的・記述的な Duden や Jung のような文法書ではなくて、むしろ外国人のための実用的な独作文の指針ともいべき Schulz-Griesbach や Helbig-Buscha であるのは興味深い。Schulz-Griesbach にも Helbig-Buscha にも、“Modal” という用語の使用法には依然として概念の混淆が見られるが、——例えば、Schulz-Griesbach の副詞語順の説明にある *te-ka-mo-lo* の Modal 概念、Helbig-Buscha の Modal-adverb, Modal-angabe, Modal-bestimmung, Modale Konjunktion, Modale Partizipialkonstruktion, Modalsatz などの Modal は客観的な Art und Weise の表現の説明に使われており、われわれのいう Modalität とは直接の関係はないが、Modal-glied (Schulz-Griesbach), Modal-faktor, Modal-verbindung, Modal-wort (Helbig-Buscha) の Modal は主観的な Modalität の表現の説明に使われているといった具合である。——両者に共通しているのは、主観的表現と客観的表現を区別する態度である。Schulz-Griesbach は Modalverben の主観的用法と客観的用法（つまり、Modalität があるかないか）を具体的に説明⁶⁹し、それが Duden 第三版に大きな影響を与えている。Helbig-Buscha も Modalverben の主観的用法と客観的用法に考慮を払うのはもちろんであるが、更に、Duden の副詞区分では Umstände der Modalität を表現するもとのされている $\alpha, \beta, \gamma, \delta$ の四種の副詞の中の δ (die Redeweise, die Modalität der Aussage im engeren Sinne) に Modalwort という特別の名称を与え、副詞の中に潜む主観的表現 (Modalität) と、その文法的特性に初めて詳しい説明を加えている⁶⁹。それによると Modalwort (厳密な意味での Modaladverb) はわずか40語くらいしかなく、それに二種の区別があるという。

1. 付加語的に使用されず、格変化も比較変化もおこなわないもの

(allerdings, anscheinend, bedauerlicherweise. zweifelsohne)。

2. 形容詞として付加語的にも使用され、格変化もおこなうもの (angeblich, augenscheinlich, bestimmt. . . . wirklich)。ただし、比較変化を行うものはきわめて少ない。

2の種類の Modalwörter は、更に形容詞的に使用されても意味が変わらないものと、別に Er besucht uns sicher. — Sein sicheres Auftreten hat alle beeindruckt. の sicher のように、形容詞的に使用されると意味が変わってしまうのみか、Modalwort の性格すら失うものがある。Modalwort は形態や語順のうえからは他の副詞と判然と区別出来ないで、Er spricht bestimmt mit ihm の場合のように、bestimmt が nachdrücklich, eindringlich の意味で普通の副詞として objektiv に Art und Weise des Sprechens を表現しているのか、あるいは、ohne Zweifel, sicherlich の意味の Modalwort として subjektiv に Stellungnahme des Sprechers gegen seine Aussage を表現しているのか判然としない場合が応々にして生じる。が、次の三点でそれらは他の Art und Weise の副詞とは異っている。

1. 副文を有する主文に書き直すことが可能である。

Er kommt vermutlich. —→ man vermutet (es ist vermutlich so), daß er kommt.

Er kommt pünktlich. —→ *Es ist pünktlich, daß er kommt. (不可能)

Helbig-Buscha はここで Modalität についてきわめて、重要な示唆を与えている。つまり、Modalwörter は判断を示す主文として、副文で表わされた出来事を評価するものであるから、独立した文の性格を有するものであり、それに対して他の Art und Weise の副詞は Prädikat で表わされた

出来事に付加特性を与えるものであるから、論理的な意味で Prädikat の potentes Prädikat をなすものであるというのである。つまり、分離動詞の前綴と同じ機能を有している。(論理的には $f(x) \cdot g(f)$ となる)。

Er kommt pünktlich. → Er kommt. Sein Kommen ist (geschieht) pünktlich.

Er kommt vermutlich → Er kommt. *Sein Kommen ist vermutlich.

さらに、

2. 決定疑問に対しては Modalwort 一語で答えることが可能であるが、Art und Weise の副詞では不可能である。

Er kommt vermutlich. Kommt er? Vermutlich.

Er kommt pünktlich. Kommt er? *Pünktlich.

このことも Modalwort / Modalität が独立文の性質を有していると考えられる有力な証拠といえよう。

3. 否定の nicht は、Art und Weise の副詞の前に必ず置かれるのに対し、Modalwort では後に置かれる。

Er kommt nicht pünktlich. *Er kommt pünktlich nicht.

Er kommt vermutlich nicht. *Er kommt nicht vermutlich.

Helbig-Buscha はこの違いをドイツ語の語順にみられる 定形動詞との関係——定形動詞と関係の深いものほど後置される——から説明し、Art und Weise の副詞は定形動詞と緊密な関係にあるのに対し、Modalwort はそうではないと解釈している。われわれは、Modalwort と nicht の関係はもっと違った観点からも分析出来ると考えるが、Helbig-Buscha の説明でも、少なくとも Modalität に関しては十分に納得の出来るものである。

Modalwörter の三つの特性で明らかになったことは、Modalwörter / Modalität は評価や判断を意味する独立の主文としての性格を有し、副文と

して、その Modalwort を除いた文を従えているということである。Helbig-Buscha は Modalwörter の Konkurrenzformen として、上述の主文—副文構造 (Vermutlich ist er krank. → Man vermutet, daß er krank ist.) の他に、Modalverben を使う方法 (Vermutlich ist er krank → Er kann krank sein), Präpositionalgruppen (Er war zweifellos krank. → Er war ohne Zweifel krank) をあげている。われわれはさらに、一種の音調をあげることもできよう。

Modalverben も Duden の説くように命令法をつくることが出来ない点や、或る種の意味内容 (Modalität の表現) の場合には本動詞の省略を許さず、構造的に二重構造 (論理的な副文構造) を持ち、完了形をつくらないなどの点で、構造的に Modalwort の深層構造とよく似たものを持っている。これがやはり同様に論理的に二重構造を有する命令法や Konjunktiv を使った表現と互換性のあることは良く知られた事実である。更に、この Modalwort, Modalverb, Konjunktiv, Imperativ を使って表現しうる共通の意味内容は、特定の音調によっても表現することが可能である。(一部は ohne Zweifel のような前置調句によっても表現可能である。) われわれが考える Modalität は、それらに共通の意味内容のことである。

表層構造、あるいは現象形態はさまざまであるが、Modalität に共通していることは、要約すると

1. 客観的に Art und Weise を述べるものではなく、
2. 主観的に話し手の立場、判断、評価、時としては情緒的態度をも表現する。
3. 常に話されている時間、話し手からみた現在が基準となっていて、
4. 否定表現が出来にくい。
5. 命令文が出来にくい。

6. 論理的にみて、述語部の述語をつくるものではなく、文全体の上位文をつくっていて、(論理的に $M[f(x)]$),

7. その上位文の主語は常に一人称である。

つまり、文全体を変項とする演算子 (Operator) の一つであると考えられるが、この演算子は客観的・論理的な真偽判定の困難な、歴史的条件下の中に深く根ざしている。話し手の歴史的な個人性と発言の際の状況によって値を変えて行く演算子であるというのが Modalität であり、それが言語の論理的内容と個人の体験とをつなぎとめる重要な文法的手段となっていると考えてよいであろう。

語用論 (Pragmatik) や社会性とも切り離すことの出来ない Modalität の文法構造を、その深層構造からあらゆる表層構造にわたって、理論的・体系的に分析記述した労作は、Brinkmann も述べているように、ドイツ語の領域ではまだ存在していない。どのような場合に Modalität は Modus の形をとり、どのような場合に Modalwort を使う表現となるのか。また、助動詞とか音調とかの単一な表現を使う場合と、それらを組合はせた場合のさまざまな条件 (wenn er doch käme!) も理論的に十分に説明されているとはいえない。この小論でも Modalität の全貌を明らかにすることなどはいまのところとうてい不可能であるが、深層に横たわる文法構造の二三の点を指摘してみたいと考える。

Modalität をわれわれと同じように考えているドイツ文法家に Admoni と Brinkmann がいる。Admoni はロシアの人であるが、東ドイツのドイツ文法に大きな影響力を持ち、Brinkmann は鋭い直感的な言語分析で西ドイツの文法家に一種の研究の指針を与えつづけているので Modalität の文法構造の分析に移るまえに、われわれはこの二人の文法家の抱いている Modalität 概念にも注意しておきたい。

Admoni は文法範疇の中に、Peschkowski の説にしたがって、objektiv なものと subjektiv-objektiv なものの区別を設けている。objektiv な文法範疇というのは、例えば行為の対象としての目的格とか、数といった範疇がそれにあたり、人間の意識の中に反映している客観的な現実の事態を普遍的・抽象的な形で表現するもので、Admoni はそれを logisch-grammatisch な範疇とも称している。これに対して subjektiv-objektiv な範疇とは、例えば人称、時間、Modus といった範疇がそれにあたり、言語によるコミュニケーションのプロセスと深くからみあっていて、そのプロセスを構成する役目を果している範疇のことである。人称でいうと第一人称とは Sprecher 自身のことであり、第二人称とは相手のことで、第三人称とはそれ以外のものというように、具体的なコミュニケーションの過程を考えないと意味をなさない。Admoni はそれを kommunikativ-grammatisch な範疇とも称している。この範疇がたんに subjektiv でなく、subjektiv-objektiv といわれるのは、これが完全に subjektiv というのではなく、どの Sprecher にもあてはまる範疇、つまり、der Redende が ein jeder Redende=ein “überindividueller” Redender と解されているからである。彼によれば、Modus の本質は Sprecher が自己の陳述の実体をどのように評価しているかということであり、つまり、kommunikativ-grammatisch な範疇に属する。Admoni はこの「評価」を Modalität と言うのである。Modalität は Modus, Modalwörter, Modalpartikeln (doch, zwar...) で表現されるが、彼によれば、いわゆる Art und Weise の副詞は Prozeß や Eigenschaft を特徴づけるものであるから logisch-grammatisch な範疇に属する。Modalverben の Modalität は、Admoni によれば、彼の規定する Modalität 概念とは別の Modalität であるという。これは文の主語と、不定詞によって表現される行為との関係がどのような

ものであるかを表現するものであって（つまり、Helbig / Buscha の用語を使うと、述語の述語）、Specher の関与しない logisch-grammatische Modalität だと考えられるという。こうした意味で Modalität という言葉を使うことは、彼の Modalität の概念規定からすると矛盾した使い方であるが、lassen や haben + zu + Infinitiv, sein + zu + Infinitivなどを Modalverben の Umschreibungen と見なしている態度からみて、彼の考えていることは明らかである。つまり、不定詞で表現されている行為の主語は、普通は定形動詞（Modalverben）の主語と同じであるから、Modalverben の部分は不定詞部分（これを文とみる）の上位文であるが、Sprecher の主観的な評価は上位文には関与していないと見なしているらしい。（ $G[f(x)]$ ）
Er kann schwimmen → Er kann (Er schwimmt).（われわれはむしろ Er schwimmt fehlerlos / mit Schwimmfähigkeit つまり、述語の述語 $f(x) \cdot g(f)$ と理解する。）lassen の場合は、不定詞部分に上位分とは異なる主語が来るが、構造的にみて Sprecher の判断の関与しない副文構造をつくる点では彼の考える Modalverben の構造と同じである。

Er läßt sie ein Lied singen → Er läßt (Sie ein Lied singt). この構造は感覚動詞や helfen, heißen などとも同じであり、Admoni の考えるいわゆる logisch-grammatische Modalität は、さらに lernen, lehren, bleiben などにも見られるであろう。つまり、Admoni は Modalverben に副文性は認めるが、本来の意味での Modalität は認めていないのである。Modalverben の考察では Duden 第三版の方が体系性に欠けるとはいえ Admoni よりは観察が的確であるように思われる。

Admoni の Modalität 論の中で他の文法家に見られぬ特徴は、Negation を kommunikativ-grammatische Kategorie と見て、Sprecher が自己の談話の内容の持つ Realität に対する立場を表現する文法手段であるから

Die Negation ist also eine modale Kategorie と断定していることである。⁽²⁴⁾
一般の Modalität が二者択一の評価判定を行わないのに対して Negation
は二者択一を行う点が違っているともいっている。われわれは Helbig-
Buscha で Modalwörter がふつうには否定され得ないものであることを
知った。つまり、意味構文上の分布は相補的ともみられ、殆んど両者が類
縁の範疇であることを示している。Duden 第三版もこの点にふれて、

Diese Modaladverbien (Helbig-Buscha の Modalwörter にあたる
もの) können als Antwort auf eine Entscheidungsfrage verwendet
werden, so daß zwischen *ja* (*jawohl*) und *nein* eine breite Skala
von modifizierter Antwort besteht:

Kommt er zu Besuch? Ja, jawohl, zweifellos, sicherlich, bestimmt,
sicher, vielleicht, möglicherweise, kaum, nein.⁽²⁵⁾

と述べているが、それでも Negation を modale Kategorie に入れていな
い。論理的に考えると、Negation は二値の真偽問題に属し、Modalität
は直接には属さないのであるから、たとい文法構造上の親近性は無視でき
ないとしても、Admoni のように両者をただちに同一範疇のものと断じる
のは問題である。また、Modalwörter は否定の形で用いることはできな
いといっても、否定文に Modalwörter を加えることはできる。つまり、
ある条件のもとでは（例えば多値の世界では）両者は併立することが可能
なのだから、両者は一応別種の範疇に属すると見た方が妥当であろう。

Kommt er? *Er Kommt nicht vielleicht.

*Nicht vielleicht.

しかし: Er kommt vielleicht.

Er kommt vielleicht nicht.

Vielleicht nicht.

Admoni と同じように、コミュニケーションの場を背景にして文法を考える Brinkmann は、大著 Die deutsche Sprache の中にわざわざ Modalsystem という章を設けて詳細に考察を展開している。彼も Modalität は文そのものに付加される要素であると考え、Unter Modalität wird die Geltung verstanden, die einer Äußerung sprachlich zuerkannt ist と定義する⁽⁸⁷⁾。が、発言における Sprecher の立場だけを終始一貫して強調せず、コミュニケーション自体を中心に据えるために、時として Modalität の中に Sprecher の評価の関与しない論理的な高階述語構造や、述語の述語を形成している構造を混入させている。例えば、haben + zu + Infinitiv と sein + zu + Infinitiv をも Modalität の中に入れ、その説明にあたって、この構造は主語がどのようなプロセスにむかって規定されているかを表わし、その規定は客観的に表現されており、話の場とは無関係に理解されうるものであるなどと、われわれの考える Modalität の概念とは別の考え方で説明している⁽⁸⁸⁾。この混淆は彼の Modalverben の考察にもあらわれており、完了形や過去形をつくれる (Sprecher の評価の関与しない) 述語の述語としての Modalverben の場合も、完了形や過去形をつくれない主観的な場合も (文の述語)、同様に Modalität を有する⁽⁸⁹⁾と考え、ただそれぞれの場合で Modalität の性質が違うのだと見ている⁽⁹⁰⁾。また、Weinrich のいう Assertionsmorpheme⁽⁹¹⁾ としての Ja と Nein を das grundlegende Phänomen der Modalität と考えている⁽⁹²⁾。Admoni の場合に述べたように、われわれは Ja と Nein を Modalität の範疇に直接加えるのにためらいを覚えるのだが、Brinkmann ではそれらが Modalität の母胎とみられている。Modaladverb (Satzadverb) と Ja-Nein との親近性を主張するのも Admoni や Helbig-Buscha の説を思わせる。Brinkmann の文法は、ドイツ語の精髓を体得した Informant の直観的な情報

として随所に卓見がきらめいているが、Modalität の考察では彼の弱点である論理的な体系化への努力の稀薄さが露われているように思える。ドイツ文法として初めて Modalsystem を詳説しようとしたにもかかわらず、理論的な部分は、殆んど Admoni をそのまま引きついでいると見られても仕方がない。ロシヤや東ドイツのコミュニケーション理論と関連させた Modalität 論を取り入れたのは、西ドイツの文法家としてさすがであるが、アングロサクソン系の分析哲学と文の論理的な側面にも考慮を払ってくれたならば、更に説得力のある Modalsystem が出来あがったであろう。

音調, Modus, Modalverben, Modalwörter, 前置詞句と、われわれの考える Modalität を表現する文法手段は数多くあったが、造語法の中にも Sprecher の主観的な判断・評価を表わす手段があること忘れてはなるまい。例えば、-bar, -lich が時として Modalität を示すことをわれわれは知っている。更に、感嘆詞の持つ Modalität や Dativus ethicus, 完了態の動詞自体の Modalität などにも注意する必要がある。

II. Modalität の文法構造

われわれの考えるような Modalität がどのような体系的構造を持っているかを示すことは 伝統文法の枠内では不可能であった。伝統文法では、すべての文法範疇が表層構造をもとにして決められる。表層にあらわれた機能からして品詞が定められ、更に各品詞の文法的性質が記述される。したがって、Modalität のように、深層に implizit に存在し、数種の品詞にまたがって変形され、explizit に現象化する範疇を体系的に記述するのに適していない。既に述べたように、実際に作文する人の発想を対象にした実用文法書は早くから Modalität の重要性とその構文的な現象に気づいていたが、事実の指摘は出来ても体系化することはやっていない。

Modalität のように深層に一つの構造があつて、それが数多くの同義構文をつくる文法範疇を記述するのに適していると思われるのは生成変形文法であるが、Chomsky の標準理論では Modalität の扱い方はきわめて不十分である。J. Lerot はその間の事情を明快に次のように説明する。Modalität は必ずしも Modalverben のみで表現されるとは限らず、ある Sprecher が ich halte es für möglich, daß der Briefträger krank gewesen ist という内容を表現する場合に、例えば

(1) Es ist möglich, daß der Briefträger krank gewesen ist.

(2) Der Briefträger kann krank gewesen sein.

の二つが考えられ、この二つの文には Proposition と Modalität の違いは認められず、同義文と見なされる。Chomsky の分析をこの文に適用してみると、(1)の文では Matrixsatz として $\Delta + \text{Präs} + \text{sein} + \text{möglich}$, Konstituentensatz として der Briefträger ist krank gewesen があり、埋め込み変形が行われている。その規則を簡単に示せば、

(T—daß)

$$\left. \begin{array}{c} X \text{---} \Delta \text{---} Y \\ \quad \quad \quad S \end{array} \right\} \Rightarrow X \text{---} \text{daß} + S \text{---} Y$$

となる。

これを(1)の Matrixsatz と Konstituentensatz に適用すると、

(3) Daß der Briefträger krank gewesen ist, ist möglich.

が出来あがる。これに非人称代名詞 es を使う変形規則

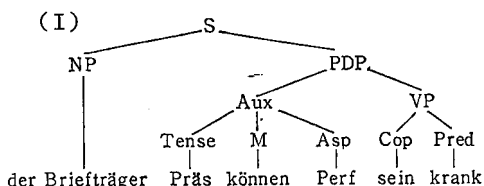
(T—es)

$$\text{daß} + S \text{---} \text{Aux} + \text{sein} + \text{Adj} \Rightarrow \text{es} \text{---} \text{Aux} + \text{sein} + \text{Adj} \text{---} \text{daß} + S$$

を更に適用すると(1)の文 Es ist möglich, daß der Briefträger krank gewesen ist が最終的に得られる。(2)の文は語順の変更がないので標準理

ドイツ語における Modaltät の概念とその文法構造 (1)

論にしたがって図式にすると下図のようになる。

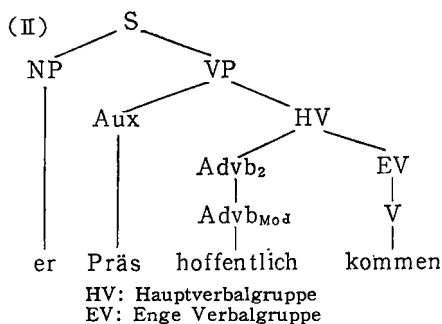


更に話法の副詞 (Modalwörter) を使って同じ内容に表現することも可能であるが, Chomsky は Modalwörter を使った例を考慮していないので, Lerot は

(4) Ich hoffe, daß er kommt.

(5) Er kommt hoffentlich.

の二文を使って, Chomsky と同じ標準モデルで分析する R. Steinitz の考え方を図式で次のように示している。すると, (4)の文の構造は(1)の文と同じだが, (5)の文の構造は, (11)図のようになる。



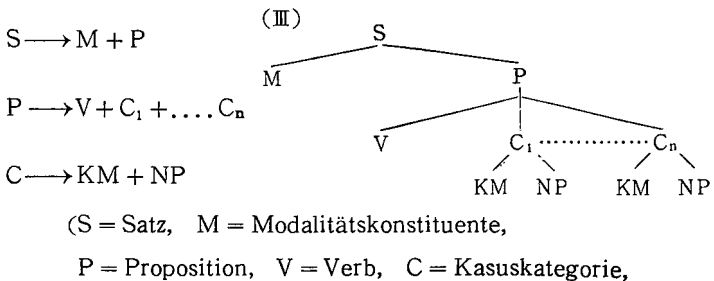
(5)の例は出来れば (1) (2) と同じ内容のものを挙げたいのだが, (1) (2) の Modalität と正確に同じ Modalität を持った Modalwort が思いあたらないために違った内容のものを使っている。しかし, 文全体にかけている Modalität が深層構造

造では実に様々なところに所属させられていることは歴然としている。(1)では Matrixatz の述語形容詞に, (2)では PDP (述語句) の Aux の部分に, 更に(3)では HV (主動詞) の中の Advb の中に入れられている。Chomsky の理論では, 意味解釈は深層構造で行われ, 同義表現の文は同じ深層構造

から派生されなければならないのに、(1)と(2)は同義表現であるにもかかわらず、違った深層構造を持っている。(1)(2)と同義の文意で(5)のタイプの表現があれば、これまた違った深層構造を持つことは明らかである。

Chomsky の標準理論の特徴の一つは、定形動詞で表現される文法範疇(例えば、時制、話法)をすべて述語の中の Aux 部門から派生させ、また、副詞はいかなるものでも述語句の一部である主動詞から派生させている点である。つまり、深層構造の考察においても、まだ表層の語形や語彙にとらわれていて、しかも、あらゆるものを文という単位の中で処理しようとしたため、語彙のみならず、文の枠をも超えてコミュニケーション自体と結びつく Modalität のような、最も深い層に潜む文法範疇の把握が不充分であったように思われる。

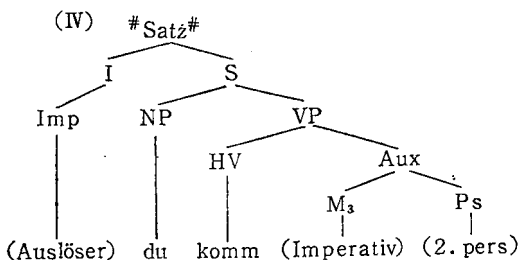
Modalität の問題が新たに文法問題として登場したのは C. J. Fillmore のいわゆる Kasusgrammatik が発表されてからのことである。しかし Fillmore の場合、Modalität は積極的に考察されたのではなく、さまざまな Kasus で処理出来る部門 (Proposition) から取り残された文法現象をすべて Modalität と称したまでのことであって、Tempus, Aspekt, Modus などが雑然と放り込まれた部分である。Kasus の部分についてはかなり精密な考察と規定を行っているが、Modalität の厳密な規定は行っていない。Kasusgrammatik の基本構造はおよそ次のようになっている。



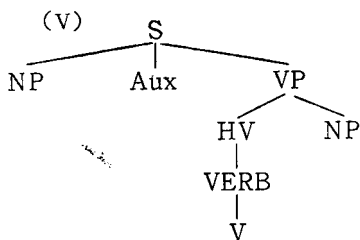
KM = Kasusmarker, NP = Nominalphrase⁶³⁾

Proposition の内容は動詞を核にして、それをめぐってさまざまな意味を帯びた名詞句が結合し、Tempus も Modus もない文を形成している。この部分は、Tesnière-Erben-Helbig / Schenkel と受けつがれた Valenz-Theorie の核文に似ていないこともないが、何よりもすぐに思い浮ぶのは記号論理学であり、Proposition とは第一段階の原子命題 (atomische Proposition) であり、M の部分はその命題を主語とする高階 (höhere Stufe) の述語という聯想である。ただし、Kutschera や F. Schmidt もいうように、記号論理学の論理語の構造と自然言語の構造はきわめて類似しているが、決して同じものではなく、高階述語構造も Fillmore の場合には、ただ似ているというにすぎない。のみならず、Fillmore の M からは John washes his car *in the garage* における場所の副詞句などのようなものまで導き出されるとされているので、文法学者特有の述語の述語 $f(x) \cdot g(f)$ と、文の述語あるいは Modalität なき高階構造 $G[f(x)]$ の混淆がみられ、その実態はかなりあいまいである。しかし、少なくとも Modus と Tempus を標準理論のように助動詞や副詞にばらばらに所属させずに、一挙に文全体の述語に還元したことは卓見といわねばなるまい。ここから自由に Modus, Modalwörter, Modalverben の Modalität が変形操作により自由に導出されうるからである。

Modalität を文全体にかけられた述語という考え方でとらえたのは Fillmore が必ずしも初めてではなく、標準理論の発表される以前に Bierwisch も考えていた。もちろん生成変形文法の標準理論発表以前の初期のことであるから、体系づけられたものではないが、図式で示せば次のようなものであった。⁶⁴⁾



表現全体が Satz → Imp + S と二重構造になっているのが特徴である。Modalität が Imp と Aux の二ヶ所に出ているのをみると Chomsky の影響がいかに強かったかがよくわかる。標準理論が発表されてからも Bierwisch は Chomsky 流の Aux の構造に釈然としないものがあつたらしく、あらたに Aux を VP から切り離して VP と同列に置き、直接 S の支配下におくモデルを発表している⁽³⁹⁾。東ドイツには記号論理学の系統を



引く Franz Schmidt の論理学的文法があり⁽⁴⁰⁾、既に1960年頃に自然言語の Modalität について見事な定義が行われているので、Bierwisch としては Chomsky にそのまま追随出来なかったのかも知れない。Schmidt はいわゆる文法家で

はなく論理学者なので、具体例には乏しいが分析は正確である。彼によると、

Morgen wird es wohl (vielleicht) regnen.

Morgen kann (dürfte) es regnen.

Es ist möglich, daß es morgen regnet.

は、ギリシヤ語だったらすべて Modus potentialis として α_v をともなう Optativ で表現出来るものであり、その Modalität は同一であると考えている。つまり、共通の基礎構造を想定しており、それは Indikativ で表わさ

れる原子命題と同じ段階のものではなく、高階の独立した文であり、しかも、それは Sprecher が自己の発言に対してとる立場を表現するものと述べている。更に重要なことは、日常言語の Modalität は論理学でいう Modalität とは違ったものであると言明している点である。彼は Aristoteles, Kant, Hegel, Russel, Becker, Carnap, N. Hartmann の Modalität 概念を調べたうえ、それらが認識理論的、論理的、存在論的な概念であるのに対し、日常言語の Modalität, Potentialität はあくまで Sprecher の主観的な判断の表現にすぎないと書いている。つまり、コミュニケーションのレベルでの問題であるとみなしている。⁽⁴⁰⁾

Schmidt は Modus の説明を終えるにあたって、weitere Existimationen という問題で、当時のドイツとしては驚くべきことを言っている。つまり、ドイツ語の動詞の中には一人称で使われると、その動詞の述べる行為とその一人称の発言とが重なり合って、Modalität 特有の Sprecher の評価・判断を表す二重構造が出来かねるものがある。たとえば、bestätigen, bezweifeln, bestreiten, segnen, verfluchen, bewillkommen, begrüßen, befehlen がそうであるという。これらの動詞の特徴は existimatorisch であるか、emotional な立場を表明していることで、発言がすなわち主体的なコミュニケーション行為となっている。⁽⁴¹⁾ Schmidt の考え方を言語学的にテストすることは簡単で、それらの動詞を一人称にし、(かつ現在の意味で) Modalwörter をつけるか、接続法にしてみると、奇妙なドイツ語が出来あがる。つまり、現実に Sprecher が例えば bestätigen という行為をしているのに、それに対してその Sprecher が評価・判断を加えるということになるからである。彼はこの種の動詞を Verben der Sprechverwirklichung と呼んで特別に扱い、さらにまた、もし Sprecher が一人称で使用すると、それ自体が立場を表明する意味を持っているので、主観的な立場を

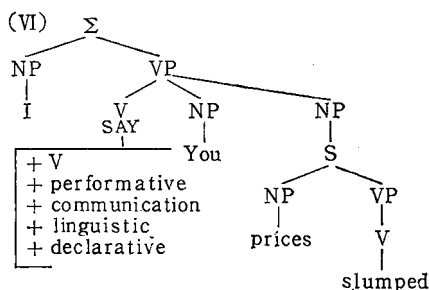
つけ加えにくい動詞群があることも言っている。インドゲルマン語では、古来この種の動詞は独特の構文を発達させて来ており、ギリシヤ語やラテン語では二重四格とか *accusativus cum infinitivo* をつくり、また、英語では願望・命令・許可・発言・思考を表わす動詞が受動態をつくれぬ *accusativus cum infinitivo* 構文を伴うことは良く知られているという。われわれは更にドイツ語では感覚動詞を加えることも考えられよう。フランス語で願望・発言・思考を表わす動詞が目的語として純不定詞を要求することも知られている。Schmidt が *Logik der Syntax* の *Modus* の章で述べている特殊な動詞群は、理論的に整理されたものではないが、明らかに Austin のいう *performative Äußerung*, *performative Verben*, *illokutionärer Akt* のことである。それらの動詞が構文的に独特な形（論理的二重構文）を発達させて来ていることなど、Austin の説よりも文法的であるとさえいえる。時期的にみて、両者の間に学問的な交流があったとは思えないだけに、Schmidt の指摘は貴重であり、日常言語の *Modalität* を論理学の *Modalität* とは別種（*kommunikativ* なもの）であると見、言語の *Modalität* の根元を求めて *performative Verben* に着目して *Modalität* との共通点を見つけようとした姿勢は、1970年代の Chomsky 以後の言語学を先取りしているようなところさえある。Bierwisch が Chomsky の *Aux* 構造に簡単に追従出来なかったのも当然であろう。

英国では、後期の Wittgenstein の影響を強くうけて、その頃 Austin が *performative Verben* について注目すべき考察をしている。考察は Schmidt よりもはるかに詳細であって、*Modalität* との関係も既に指摘されている。Austin は発話行為に三つの基本的な区別をたてている。第一は表現的行為（*lokutionärer Akt*）と呼ばれるもので、普通に考えられている文を発することである。第二は、その文を発することによって結果的な

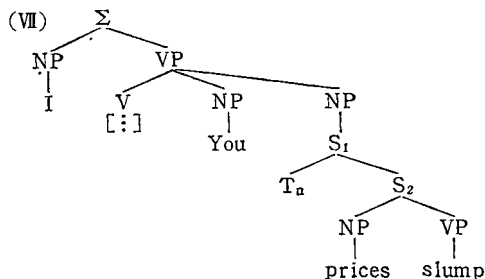
にかを行うことで、表現遂行行為 (perlokutionärer Akt) といわれる。第三は、文を発すること (lokutionärer Akt) がそのまま、ある行為を行うことになるという言表で、この種の行為を非表現的行為 (illokutionärer Akt) と呼んでいる。かりに、寒い日に部屋の窓が偶然に開いていたと仮定しよう。A は B に窓を閉めて欲しいと思っている。「窓が開いてるよ。」と A が B に言う。あるいは、「いっとくけど、窓が開いてるよ。」とも言うであろう。この「いっとくけど」の部分が illokutionärer Akt であり、「窓が開いているよ」の部分が lokutionärer Akt であり、もしその発話行為が B に窓を閉めさせたとなると A の発話行為は表現遂行行為であるといえよう。むろん、この例のように特定の発話が三種の行為のいずれかに分類されるというようなことは稀であって、現実の発話は三つの面を何らかの形ですべて含んでいると Austin は見ている。彼はその中の非表現行為に特に関心を寄せ、その性質を特に明確に持つ発言を遂行的発言 (performative Äußerung) と呼び、典型的な遂行的発言に用いられる動詞 (例えば, promise, swear など) を遂行動詞 (performative Verben) といっている。これらは典型的な遂行的発言においては、すべて第一人称・現在・直接法・能動で用いられる。遂行動詞のかかる文法的特性は、われわれが第一章で考察した Modalität を含む文の高階構造に使われる動詞または形容詞構文ときわめて類似している。だが発言、もしくはコミュニケーションそのものに関係している performative Äußerung は、常に explizit (顕在的) に動詞の形をとって出てくるとは限らない。他の品詞 (例えば Satzadverb) とか、語尾変化 (例えば、命令法、接続法)、語順 (例えば、疑問、命令)、あるいは音調、あるいは他のコミュニケーション手段 (例えば身振りや表状) の形をとることもあろう。ことによると、文体 (例えばイロニー) に現われているかも知れない。しかし、あえてこれらの言語現

象ないしコミュニケーション現象の根元を求めれば, performative Äußerung の一部に還元できると考えられるのである。

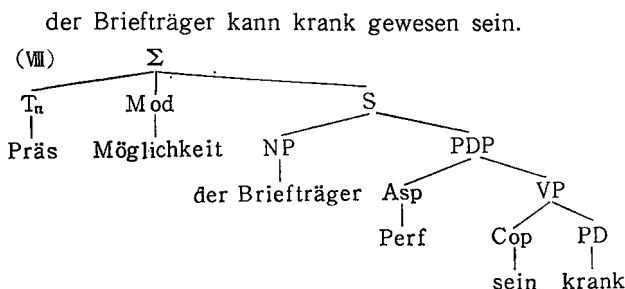
Performativer Akt を文法理論の考察に取り入れ, あらゆる文の深層構造に performative Verben を想定することは, 1970年前後から英国 (Boyd/Thorne) や米国 (Ross, Householder) で行われ始めた。⁽⁴⁴⁾ 前者はわれわれと同じように Modalität の根元をそこに求めようとするものであり, 後者は生成変形文法の深層構造の説明一般に使おうとするものであった。Ross は通常の平叙文 Prices slumped の深層構造として [I SAY TO YOU] Prices slumped のごとき形を想定している。SAY は say に近い動詞を抽象的に考えたもので [+Performative] [+Communication] [+Linguistic] [+Declarative] といった特性を備えているとみられる。



Ross の図式の下位文の中には時称が Aux として入っているので, かりに Fillmore の考え方をとり入れると,



(VII) のように三重構造の深層構造が出来あがる。この構造の中の最も深い文に潜んでいるとみられるのが Modalität とみられ、Modalität の質は performatives Verb の特性の組みあわせで決まると考えられる。したがって、Lerot が考えた次のモデルはまだ不充分である。⁽⁴³⁾



Lerot の Modalität は、質の点であいまいであり、Ross のモデルの方が Modalität の質にまで考察が及ぶという利点がある。たとえば(VII)図の場合〔+communication〕〔+linguistic〕〔+declarative〕が表層文の Modalität (直接法, Modalwörter なし)を決定している。かりに performatives Verb の特性が SAY と違って, THINK とか, BELIEVE とかであると, 表層文は prices will slump, もしくは prices surely slump になるかも知れない。

Performative Verben の詳細な言語学研究はまだ充分に行われていない。言語学の方では、ドイツ語に限って言えば、R. Bartsch が Satzadverbiale を performative Funktion と関係づけて解釈しようと試みたり、⁽⁴⁷⁾ 社会言語学で Kummer, Joas / Leist の研究が注目をひくくらいである。⁽⁴⁸⁾ 或る特性を持った performatives Verb が何らかの理由で消去されると、どのような表層構造をともなった文として変形再生, もしくは生成されるか、その間の変形規則はどうなっているのかといったことは、現存するドイツ語

の動詞の performativ な使い方を徹底的に調査し、特性を分類し、それを使ったさまざまな複合文を実際につくってみて、しかも performatives Verb を消去した代替文 (äquivalente Sätze) を吟味してみないと想像することは難しい。また sollen のような Modalverb の場合、man sagt, daß... と考えると Modalität を失くしてう。ich höre, daß.... では一種の Modalität は出て来ても、複雑な sollen の文法構造 (二つの Kommunikation が互いに交錯している) は説明出来そうにもない。恐らく、現実には存在しない抽象的な特性を備えた架空の動詞を理論的に案出しなければならなくなるであろう。Perfomative Äußerung のこまかな区分が必要である。

Illokutionäre Akte そのものの分析は分析哲学の方ではかなり進んでいるように思われる。たとえば Searle は illokutionäre Akte を 8 種に分類し、それぞれの命題内容、前提、Sprecher の本心、効果、その他についての違いを表にして挙げている。⁽⁴⁹⁾ 例えば、感謝の illokutionärer Akt は命題内容として、「過去に聞き手によって行われた行為」を規則として有し、前提として、「その行為は話し手の役に立ち、話し手はその行為が自分に役に立つことを信じている」。しかも「話し手はその行為に対して感謝の念を持ったり、真価を認めたり」していなくてはならない。その illokutionärer Akt は「感謝もしくは真価承認として効果を持っていないなくてはならない」。別の例をあげると、挨拶の illokutionärer Akt は、命題内容として何も有しない。前提は話し手が聞き手に出会ったり、紹介されたりすることで、話し手の本心には何もないが、この illokutionärer Akt は話し手が聞き手をあいそよく、または、いんぎんに再認識するものとして効力を持っていないなくてはならない、等々である。これらの種類の illokutionäre Akte が、はたしてどんな遂行動詞 (抽象的に仮定されたもので

もかまわないが)と結びつくのかは不明である。ただ明瞭なのは、話し手と聞き手の歴史的経験、コミュニケーションの際の話し手の気持、価値観、社会規範が深くからんでいる点である。言語の現実適合性、経験による確認に関して、かつて Bar-Hillel は、「(現実との)の対応規則をとまなない理論それ自体は、解釈を受けていない計算にひとしい。その理論に含まれる〈用語〉も〈文〉も、それまでのところはまだ意味作用を与えられていず、したがって、理論的な下位言語(抽象的モデル、形式体系)は、それ以前の状態においてはコミュニケーション手段として利用不可能である」⁶⁰と述べたことがあるが、performative Verben とその変形とみられる Modalität がその言語と現実を結びつける重要なきつなのひとつであることは間違いないように思われる。そして、発言にはすべて何らかの形で performative Äußerung が, explizit にせよ, implizit にせよ, 深層に潜んでいるとするならば, illokutionäre Akten の諸規則を、話し手と聞き手が共通の了解事項として心得えていない時には自然言語によるコミュニケーションは原則として成立しないということにもなる。コミュニケーションが行われるための必須条件、ないし体制として、参加者の Homogenität ないし Konsensus を前提とした *ideale Sprechsituation* を想定しなければならないと説く J. Habermas⁶⁰ は、少なくとも illokutionäre Akte の分析を通して見る限りでは、まったくただしい。そのような *kontrafaktische, ideale Sprechsituation* が現実によりうるかどうか、コミュニケーションが果して正確に行われているのかどうか、大部分の発言は Dialog でなくて Monolog なのではないか、ということはまた別種の問題である。

Implizit に高階構造を持つ複文をつくるのは Modalität だけではなく、文法的な時間表現、使役表現, sollen の如き複雑な Modalverb もそうである。それらの Satzoperatoren が深層構造において、お互いにどのような

関係にあるかを考察した先駆的研究が Seuren によって発表されている。⁶⁴⁾ Seuren の研究は Chomsky の標準モデルを修正する形で行われ、着眼点にも方法論にも、Fillmore と共通したところが多々あるように思われる。時期もほぼ同じ頃であるが、直接の関係はないようである。Fillmore が Satzoperatoren を M という形で Proposition から切り離し、M の内容にはあまり吟味を加えず、むしろ Proposition の内容を検討したのに対して、Seuren は逆に Proposition にはあまり吟味を加えず、Operatoren に考察の主眼を置いている。彼の用いた方法は、述語論理・限量計算を使って英語の深層構造を記述する方法である。彼の使った Operatoren は Modalität や Tempus のように文全体の述語となる qualifier と、any, some, every, all のような限量詞 quantifier の二種であるが、後者はわれわれの問題にいま直接の関係はないので前者のみを考えてみることにする。彼の Modalität の概念規定は、われわれの概念のようにコミュニケーションに基いた自然言語独特の Modalität ではなく、論理学的な Modalität をも含んでいて、例えば、仮定法や Modalwörter の Modalität と、直接法の John could come の持つ客観的・論理的な Modalität [われわれの考えでは主語と不定法の関係を表わす述語の述語 $f(x) \cdot g(f)$] とを同一のものとみているところがあるので彼の Operatoren のモデルには修正が必要である。初めに彼のモデルをあげて、次に修正モデルを示してみたい。

彼によると qualifier には二種類あるという。その一つは sentence-qualifier と呼ばれ、主張 (ASS), 疑問 (QU), 命令 (IMP), 暗示 (SUGG) がこれにあたる。これらの sentence qualifier はつねに発言全体の述語として使われ、いわば最深層にあって、構造的に埋めこまれた文には使われないという。他の一つは、たんに qualifier と呼ばれ、時称 (T), 話法 (MODAL) がこれに属する。これらは構造的に埋め込まれた文にも使わ

ドイツ語における Modalität の概念とその文法構造 (1)

れる qualifier であると考えている。それらの深層構造は次のようになっている。

- i. Sent $\longrightarrow$ SQL + Prop
- ii. SQL $\longrightarrow \left\{ \begin{array}{c} \text{ASS} \\ \text{QU} \\ \text{IMP} \\ \text{SUGG} \end{array} \right\}$
- iii. Prop $\longrightarrow$ QL + Nucleus $\left\{ \begin{array}{c} \text{[V]} \\ \text{[CV]} \end{array} \right\}$
- iv. QL $\longrightarrow$ (NEG) Tense
- v. Tense $\longrightarrow \left\{ \begin{array}{c} \text{M env IMP (NEG)} \\ \text{T (Modal)} \end{array} \right\}$
- vi. Modal $\longrightarrow$ M (Neg) Tense
- vii. T $\longrightarrow \left\{ \begin{array}{c} \left\{ \begin{array}{c} \text{Pres} \\ \text{Fut} \\ \text{Perf} \end{array} \right\} \text{ env IMP (NEG) —} \\ \text{Pres} \\ \text{Fut} \\ \text{Perf} \\ \text{Past} \\ \text{U} \end{array} \right\}$
- viii. NEG $\longrightarrow$ NEG (Neg) (Neg)
- ix. M $\longrightarrow \left\{ \begin{array}{c} \text{Poss} \\ \text{Nec} \\ \text{Perm} \end{array} \right\}$

このあとに Nucleus の構造が続くが、Nucleus (核文) はわれわれの当面の問題ではないので省略する。

この構造では、われわれからみると Modalität と思えるものが四種に大別され、更に構造的な埋め込み文 (Prop) の中でも M, あるいは Mod という略号で Modalität が登場している。Performative Verben の分析から得たわれわれの Modalität 概念からすると、普通埋め込み文の中に Modalität が現われることはない筈である。Modalität の再現の理由

は v. と vi. の Tense の繰り返しに関する例文を見るとよくわかる。

it may have been necessary for him to work. May はたしかに Modalität である。話し手の主観的な推測を表わし、現在であり、命令形には出来ない。しかし、to be necessary がこの場合に自然言語の Modalität を現わしているかどうかは疑わしい。論理学ではこれを Modalität というであろうが、自然言語の Modalität は常に現在でなければならない。have been と完了であってはならないのである。この文の同義表現は、ほぼ I suppose that he had to work であって、he had to work はわれわれの概念では kommunikative Modalität を持っていない表現である。述語の述語を Modalität と混同したために Modalität が埋め込み文の中で再現したものである。

更に気になるのは、v. と vii. で env IMP とされ命令の Modalität が構造的埋め込み文の中に再現していることである。この説明をみると、

bring me one of his letter

を IMP: you Pres bring the letter to me と分析し、平叙文から命令文を導き出そうとする工夫である。

われわれの考え方からすれば、SQL の ASS, QU, IMP, SUGG, それに Prop の QL である M もすべて performative analysis から判明した Modalität である。したがって、

i. Sent $\longrightarrow$ Mod. + Prop

となり、Mod の中にあらゆる自然言語の Modalität が網羅されなければならない。Mod の内容は

ii. Mod $\longrightarrow$ $\left\{ \begin{array}{l} \text{Perf. Verb} \\ \text{Konj.} \\ \text{Satzadv.} \\ \vdots \\ \text{Betonung} \end{array} \right\}$

と当然なるであろう。これらの内容は単独で現われたり、組み合わせあって現われたりすることが可能であり、その際の規則は Searle の illokutionary acts の分析にみられるように、たんに言語の枠内では不可能であり、必然的にコミュニケーション理論の応援を要するであろう。Prop は自然言語から Modalität を除いた客観的な部分ということになり、

iii. Prop → Temp + Nucleus

と考えねばならない。自然言語の Tempus はきわめて主観的なものであり、Brinkmann のように殆んど Modalität に近いと解釈する人もあるが、Modalität が文法的に Tempus を支配することが現実にある以上、同列とみるわけにはいかない。また Tempus が Modalität を支配することは考えられないから、矢張り、Mod. の下位で Prop の中に加えることになるであろう。Temp の内容は六時称であるが、例えば、未来形や現在形のように Mod と密接な関係があるものには Mod と Temp の間に関係をつける規則が必要である。Nucleus は内部でさらに論理的な高階構造をつくっていることが考えられる。例えば lassen などの使役の構文などそれである。したがって、Prop は再現できるようになってなくてはならない。

$$\text{iv. Nucleus} \rightarrow \left[\begin{array}{c} \text{NP + VP} \\ \left\{ \begin{array}{c} \text{KAUS} \\ \vdots \end{array} \right\} \\ \vdots \end{array} \right] + \text{Prop.}$$

NP + VP の部分をどのように展開するかは、本稿の直接の問題ではないので省略するが、われわれが副詞を考察した時に、Modalität のない副詞と見たもの、更に Modalverben の中でわれわれの考える Modalität を有しないもの、つまり、述語の述語とみられるものは、すべて VP から展開されることになるであろう。

われわれの考えた構造の中で、まだ残されたものが二、三ある。Kom-

munikative Modalität の更にこまかな分析はむろんのことであるが、Prop の中に wahrscheinlich reiche Leute のような、Modalität を伴った NP が出てくる場合や、造語法上の -bar, -lich の場合である。これは矢張り NP や Adj の中に Sent が入っていると考えねばなるまい。NP と VP の展開は、実は厳密に考えると予想以上に難問題をはらんでいて、今のように群雄割拠、諸説乱れとぶ状況では、暫く考える時間を置かねばなるまい。sollen と間接説話の様なコミュニケーションの交錯現象もこれと関連してくるものと思われる。

他の一つは否定詞の問題である。これもまた自然言語のもつ最も難しい問題の一つであり、或る Ebene では Modalität に近い性質を持ち、他の Ebene では限量詞に近い性質を有する。Modalität の中に否定が入り込めないのは performative Analyse ではっきりしているが、否定詞の考察は kommunikative Modalität の細かな分類検討と共に次の機会にゆずりたい。

注

- (1) Duden Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. Mannheim, ²1966. S. 111
- (2) Behaghel, o. : Deutsche Syntax. Bd. II. Heidelberg, 1924. S. 219 ff.
- (3) Glinz, H. : Die innere Form des Deutschen. Bern-München, ⁵1968 S. 104 ff.
- (4) Duden Grammatik. ²1966 S. 302
- (5) Duden Grammatik. ²1966 S. 303
- (6) Duden Grammatik. ²1966 S. 562
- (7) Duden Grammatik. ²1966 S. 767
- (8) Duden Grammatik. ²1966 S. 762
- (9) Duden Grammatik. ²1966 S. 116 ff. u. 122
- (10) Duden Grammatik. ³1973 S. 67
- (11) Duden Grammatik. ³1973 S. 68

ドイツ語における Modalität の概念とその文法構造 (1)

- (12) Duden Grammatik. ³1973 S. 68—71
- (13) Duden Grammatik. ³1973 S. 72
- (14) Jung, W.: Grammatik der deutschen Sprache. Leipzig. ⁴1971 S. 238
- (15) Schulz / Griesbach: Grammatik der deutschen Sprache. München. ⁹1972 S. 84—88
- (16) Helbig / Buscha: Deutsche Grammatik. Leipzig, 1972 S. 446—452
- (17) Helbig / Buscha: Deutsche Grammatik. 1972 S. 451f.
- (18) Brinkmann, H.: Die deutsche Sprache, Düsseldorf, ²1971 S. 357
- (19) Пешковский, А. М.: Русский синтаксис в научном освещении, изд. 7 Москва, 1956 S. 89 (nach Admoni)
- (20) Admoni, W.: Der deutsche Sprachbau. München, ³1970 S. 5f.
- (21) Admoni, W.: Der deutsche Sprachbau. ³1970 S. 192
- (22) Admoni, W.: Der deutsche Sprachbau. ³1970 S. 198
- (23) Admoni, W.: Der deutsche Sprachbau. ³1970 S. 165f.
- (24) Admoni, W.: Der deutsche Sprachbau. ³1970 S. 154, 242f.
- (25) Admoni, W.: Der deutsche Sprachbau. ³1970 S. 154
- (26) Duden Grammatik. ³1973 S. 309
- (27) Brinkmann, H.: Die deutsche Sprache. ²1971 S. 357
- (28) Brinkmann, H.: Die deutsche Sprache. ²1971 S. 361, 363—365
- (29) Brinkmann, H.: Die deutsche Sprache. ²1971 S. 381—400
- (30) Weinrich, H.: Linguistik der Lüge. Heidelberg, 1966. S. 48ff.
- (31) Brinkmann, H.: Die deutsche Sprache. ²1971 S. 359
- (32) Lerot, J.: Modalität, Tempus und Transformationsgrammatik. in: *Energia* 2 (1970) S. 1—11
- (33) Steinitz, R.: Adverbialsyntax. Berlin, 1969 S. 61f.
- (34) Fillmore, C. J.: The case for case. in: *Universal in Linguistic Theory.* hrsg. von E. Bach / R. T. Harms. New York, 1968 S. 1—88
- (35) Fillmore, C. J.: The case for case. (nach W. Abraham: *Kasustheorie.* Frankfurt / M. 1971)
- (36) Kutschera, F. V.: Sprachphilosophie. München, 1971 S. 52
Schmidt, F.: *Logik der Syntax.* Berlin, ²1961
- (37) 安井 稔編: 新言語学辞典, 東京, 1971. modality の項. S. 271f.
- (38) Bierwisch, M.: Grammatik des deutschen Verbs. Berlin, ¹1971. (Zitiert

- nach U. Schwarz: Modus und Satzstruktur. Kronberg Ts. 1973. S. 52)
- 39) Bierwisch, M.: Grammatik des deutschen Verbs. 1971. S. 37 ff.
- 40) Schmidt, F.: Logik der Syntax. Berlin, 1961 Ders. Symbolische Syntax. München, 1970.
- 41) Schmidt, F.: Logik der Syntax. 1961 S. 86 f.
- 42) Schmidt, F.: Logik der Syntax. 1961 S. 89 f.
- 43) Austin, J.L.: How to do things with words. Oxford, 1962 (Dt. Übersetzung: Zur Theorie der Sprechakte. Stuttgart, 1972) Ders.: Performative Utterance. in: Philosophical Papers. Oxford, 1970)
- 44) Boyd, J. / J.P. Thorne: The semantics of modal verbs. in: Journal of Linguistics. 5 (1969).
- Ross, J.R.: On Declarative Sentences' in: Readings in English Transformational Grammar. hrsg. von R.A. Jacobs / P.S. Rosenbaum. Waltham / Mass. 1970
- Householder, F.W.: Linguistic Speculations. London / New York, 1970
- 45) Ross, J.R.: On Declarative Sentences. 1970, S. 252
- 46) Lerot, J.: Modalität, Tempus und Transformationsgrammatik. in: Energie 2 (1970)
- 47) Bartsch, R.: Adverbialsemantik. Frankfurt / M. 1972. S. 52 ff.
- 48) Kummer, W.: Sprechsituation, Satztyp und Aussagecharakter. in: Beiträge zur Linguistik und Informationsverarbeitung. 14 (1968)
- Joas, H / A. Leist: Performative Tiefenstruktur und interaktionistischer Rollenbegriff. in: Münchener Papiere zur Linguistik 1 (1971)
- 49) Searle, J.R.: Speech Acts. Cambridge, 1969 (Dt. Übersetzung: Sprechakte. Frankfurt / M. 1971. S. 100—106)
- 50) Bar-Hillel, Y.: Three Methodological Remarks on Fundamentals of Language, in: Word 13 (1957)
- 51) Habermas, J.: Vorbereitende Bemerkungen zu einer Theorie der kommunikativen Kompetenz. in: Habermas / Luhmann: Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie. Frankfurt / M. 1971 S. 101—141
- 52) Seuren, P.A.M.: Operators and Nucleus. Cambridge, 1969.
- 53) Brinkmann, H.: Die deutsche Sprache. 1971, S. 321—356.